令和５年９月９日移動教育委員会・意見交換記録（中会議室東）

（学校教育部長）第４次教育総合計画の策定に向けて概要説明

〇今後の浜松の教育に重要だと考える取組、取り組む教育施策で重要だと思うもの

（黒柳委員）ＩＣＴ普及に伴い、ルールやモラルを守る重要性が高まっている。小中学生のうちに規範意識を身につけておかなければならないものだと感じる。インターネット利用のルールやモラル教育については、学校だけでなく家庭における教育も必要である。もう１点、家庭の経済力の格差や児童虐待について、しっかりとした支援策を構築して手を差しのべられる環境を整えることも重要である。

（参加者）ルールやモラルに対する考え方は各家庭によって異なる。考え方が違う家庭との間で規範意識をどうすり合わせるか、多様性を認め合うという点との兼ね合いもあるが難しいと感じる。また、通学路における登下校の安全確保について、ＰＴＡ加入者が減少し、会員ではない人に通学路の旗振りを求められない事態になった場合、子供たちの登下校の安全をどう見守っていくのかという課題がある。

（参加者）ルールやモラルに関することについて、公共交通機関でのマナーや立ち振る舞いについても考える機会が必要だと思う。浜松市は車社会で、公共交通機関を親子で利用する機会が少ないため、夏休みのイベントのチラシ等に公共交通機関利用券のようなものをつけておき、親子で公共交通機関のマナーを考える機会にしてもらえたら良いのではないか。高校生のバスのマナーがあまりよくないと感じる。また、教員不足について、浜松市は小学校３年生までは 30 人学級と言っているにも関わらず、教員が足りずに実現できない現状があると聞いた。保護者としては喫緊の課題と感じている。

（参加者）特別な配慮が必要な子供たちへの支援について、発達支援学級充実の一方で、通常の学級と分断されてしまっているのではないか。多様性やインクルーシブという考え方に逆行していないかと感じる。発達支援学級の子供や不登校、休みがちの子供は、学校に居場所がないと感じていることが多い。保護者も今後のことでもっと学校に相談したいと感じている人もいる。相談や支援の入り口をもっとわかりやすくして、多様性やインクルーシブについてみんなで考えてほしいと思う。

（参加者）教員の資質・能力という点が課題だと感じている。先ほどの教育長の講話で教員は多忙だという言葉が出てきたが、それが子供たちにはね返ってくるのは非常に困

ると思う。また、担任や教科担任との相性で、学校に行けなくなったり勉強が嫌いになったりする子供がいるため、教員一人一人の資質･能力の向上も重要だと感じる。また、ＩＣＴ機器の利用について、若い世代の教員とベテラン世代の教員でタブレット端末の利用頻度が異なっている。同じ学年の中でも教員によってＩＣＴ活用の格差が生まれていることは課題だと思う。

（参加者）教員の資質・能力という点で、当たり前のことができない若い教員が多いと感じる。教員の指導や育成も研修計画に盛り込んでほしい。

（安田委員）全国的に教員の志願者は減少しているが、浜松市では志願者が年々増えていると聞いている。教員の採用に関しては、志願者数だけでなくその質も重要である。優秀な人材をどう集めるか、その人材をどう育成するかという点は課題である。教育委員会や学校では、さまざまな研修や個別面談などを実施して人材の育成に努めているが、すぐに効果があらわれるものばかりではない。教員が子供と向き合う時間を確保したり、研修に取り組んだりする時間を確保するため、教育委員会では「教員の働き方改革」に取り組んでいるが、保護者の皆さんは働き方改革の取り組みに対してどう感じているのか、率直な意見をうかがいたい。

（参加者）学校は若い世代とベテラン世代が多く、中間の 30～40 代の教員が少ない。若手を育てる世代が少ないと感じる。ベテラン世代の教員はこれまでのやり方に固執しがちな部分もあるのではないか。教員の資質向上のための働き方改革ということなら、子供たちに還元されるような研修をしてほしいと感じる。

（参加者）ＰＴＡ役員になってから、教員が朝早くから夜遅くまで働く姿をみて頭が下がる思いである。ＩＣＴやＡＩをもっと活用して、フォローアップ動画や配信をするなど、教員の授業とＩＣＴを融合できたらよいと思う。
先ほどルールやモラルの話が出たが、何を大切にするか、ゴールにするかというところをしっかり共有していければ良いと思う。細かいルールにしばられると自由な発想が育たない。さまざまなことで家庭教育が大事といわれているが、なかなか時間をつくれないのでシニアの力も借りながら社会全体で子供を育てていけたらと思う。

（参加者）働き方改革で何かを変えるより、今抱えている仕事を減らすことをまず検討してはどうかと思う。

（参加者）働き方改革には賛成である。趣味の時間をもつなど教員に心の余裕があればそれは子供たちに還元されると思う。学校への電話は 18 時以降控えるようにという通

知があったにも関わらず、学校から緊急ではないような用件で18時以降かかってくることがある。教員側も一度ルールを決めたなら、それを守ってしっかり働き方改革の意識をもってほしい。

（安田委員）教員の立場からすると、物事が大きくなる前に連絡しておこう、忙しくて昼間時間がとれなかったから今電話しておこうという考えだと思うが、やはり意識改革が必要だと思う。教育委員会でも夜間電話に対する音声切り替えや、さくら連絡網による欠席連絡、給食費未納の徴収を学校業務から切り離すなど、さまざまな取り組みをしているが、まだ途上であるため保護者の方のご理解を得られたらと思う。

（黒柳委員）教員は使命感が強い方が多いと感じる。また、過剰な要求や依頼をする一部の保護者への対応に疲弊している教員もいる。働き方改革に関する取り組みは、全市的な取り組みだと教育委員会から発信するなど、教員や学校がより実行しやすい改革となるよう後押ししてほしい。

（参加者）先日、学校から教員の登校時間を7時から7時半にしてよいかと相談された。就業時間の7時50分からでよいのではないかと話すと、朝、電話で欠席連絡をする方もいるから、と話していたが、すべてにおいて丁寧に対応しすぎているから、保護者の要求が過剰になったりやってもらって当たり前になったりするのではないか。教員も休日や就業時間外はゆっくり休んでよいと思う。

〇浜松の子供たちにどのような子供に育ってほしいと思うか

（学校教育部長）令和５年度７月に部活動の地域移行について１回目の会議を行った。最初に、地域に部活動をお願いすることを前提として議論をするつもりはないとお話ししたが、地域移行しても人材や組織の受け皿がない地域は活動することができない。子供たちの部活動の時間を地域に移行した後も確保できるかという点が重要である。浜松市は他地域と比べ部活動に参加する生徒が多く、全生徒の80%を超える16,000人が部活動に参加している。国では、土日休日の部活はすべて地域に移行するというモデルを示しているが、16,000人の生徒を地域で受け入れていくのは難しいことである。会議では、従来通りというわけにはいかない部分もあるが、近隣中学校との合同チームをつくるなど、さまざまな選択肢が用意できるよう話し合いをしている段階である。少なくとも会議の結論をまとめる令和８年９月までは、土日休日も部活動を継続していく。
今後決まる新しい地域移行の形が実施されるのは令和８年９月以降ということになる。

（参加者）家庭の経済状況で格差が広がってしまうのではないか。

（学校教育部長）都市圏では民間のスポーツクラブや教室などに通う子供も多く、部活動に参加していないケースもあるが、民間クラブ等は月謝等がかかるため経済的な問題が発生する。地域や民間クラブに通う生徒もいれば学校の部活動をすることもできるという選択肢は残す形としたい。部活動の地域移行についての会議は、第１回が終わったばかりであり、関係者の意見等も聞きながら慎重に進めたい。今月末ごろ、教育委員会から部活動に関するアンケートを実施する予定である。意見を集約して議論を進めていく予定である。

（参加者）部活動に対する教員のかかわり方はどうなっていくのか。

（学校教育部長）部活動は教育活動の枠組みとは別のところにあり、教員はボランティアに近い形で顧問や指導をしている。部活動は、教員や保護者が協力して成り立っている部分もあり、地域移行となった後、引き続き教員が部活動に参画する可能性はあるが、かかわり方は変わってくるのではないか。いずれにしても白紙に近い状態である。

（参加者）クラブチームのコーチと部活動の教員では目指すところが全く異なる。地域クラブイコールクラブチームではないという理解も必要である。また、ハード面でも課題がある。体育館を使う部活動が土日に集中した場合、地域の体育館はパンクしてしまう。部活動として施設をどう利用するのかという点も示したうえで移行しなければ、子供も保護者も判断に非常に迷ってしまう。

（学校教育部長）議論の内容や方向性は、随時、情報提供させていただく。

（参加者）アンケートの対象は保護者のみか。主役は子供たちなので子供たちにもアンケートをしていただきたい。

（学校教育部長）小学校４年生から中学校３年生の児童生徒へアンケートを実施する。そのほか地域クラブを運営している方やかかわる可能性のある方に広く意見を聞きたいと考えている。

〇今後の浜松の教育に重要だと考える取組
〇今後、浜松市が取り組む教育施策で重要だと思うもの

（参加者）今後、浜松市が取り組む教育施策として、「ＩＣＴ機器を積極的に活用した教育活動」と「心を育む道徳教育や多様性を認める人権教育」に関連して、話をさせていただきたい。自身の子供は学習障害があり、字の読み書きを苦手だが耳で聴いて理解する力はあり、漢字は読めないがふりがなは読める、文字は書けないがタイピングはできるなど他とは違う学び方が効果的な子供である。デジタル教科書などがあれば他の子に遅れることなく学ぶことができるのだが、そうした機器を導入したり違う学び方をしたりするにあたって、他の子からずるい、あの子だけと言われてしまうことがある。また、反復して身に付ける努力をしていないから文字が書けないと教員に理解してもらえないこともある。学び方の多様性について、教員に理解を深めてもらうとともに、他の子供たちにも考えるきっかけにしてもらえたらと思う。先ほど発達支援学級を充実させることは、通常の学級との分断になるのではないかという話があったが、読み書きが苦手なだけなら、同じ教室内でＩＣＴを活用して学ぶことも可能になるのではないか。他と異なるから発達支援学級とわけるのではなく、一緒に学ぶことを考えてもらえたら教員不足に対しても有効なのではないかと感じる。

（参加者）子供と保護者と教員が連携して、適切な合理的配慮をいただければ、発達支援学級の子供たちも、通常の学級の中でたくさんのお友達と学校生活を送ることも可能になるのではないかと思う。

（参加者）高校を卒業した子は市外・県外に出て行ってしまうことが多い。浜松市の子供に地元に帰ってきてもらうには「郷土愛をはぐくむ特色ある学校づくり」は非常に重要なのではないか。私の子供の学校では佐鳴湖の近くにも関わらず行ったことがないという子がかなりいるようである。学校では地域や自分の住む街を好きになるような取り組みをしてほしい。

（参加者）私自身は学校が行きたくないと思ったことはなかった。それは給食がおいしかったからだと思う。学校給食を公費化していただき、子供たちがおいしい給食を食べられたらいいなと思う。

（参加者）不登校の子供の保護者は、毎日登校できるかどうかわからないので、ほとんど給食を食べることなく給食費を払っているという話を聞く。公費になればそういった心配はなくなるのではないか。

（安田委員）こうした会を一つのきっかけとして、声をあげていただき風通しを良くして皆で話し合うことが浜松の子供たちのためになると思う。もっと話したいことや意見したいことがあれば教育委員会でも学校でもぜひ声を届けていただきたい。

−令和５年９月９日移動教育委員会・意見交換記録（中会議室西）

（学校教育部山本次長）第４次教育総合計画の策定に向けて概要説明

〇今後の浜松の教育に重要だと考える取組、取り組む教育施策で重要だと思うもの

（参加者）将来の夢を持っている子供の割合が減少しており、特に中学生では67.5%とかなり低い数値で驚いた。自分自身、子供の時からなりたい職業があり、それを目標に勉強をしていたので、40%近い子供が、目的がないまま勉強をして進路を決めているのではないか、と危惧している。小学生よりも中学生の方が低い数値となっているのは、心が成長していくにつれて現実を知っていくことで、未来の夢を持ちにくくなっているという印象を受ける。最近は職業体験等が行われているか分からないが、学校教育の中で色々な職業に触れることで目標やなりたい職業が明確化してくることがあると思う。保護者のアンケート結果でも、50%以上の保護者が「夢と希望をもって自分らしく歩んでいくことができる子供を育むキャリア教育の充実」を重要だと考えており、子供たちが自分でどうしていきたいかの目標を見据えることができるような教育環境が重要だと思う。

（事務局）数値についての補足だが、実態把握調査は年度が変わっても、対象は同じ子供である。

（参加者）小中学生が大人と触れ合うのは、教職員と保護者などであり、その他の大人と触れ合う機会が少ないと思う。私は農業をしているので、食育という形で中学校と関わることがあり、農業は大変そうなイメージを持たれがちだが、子供に農業の楽しさを伝えると反応があり、授業の終わりに個別に話を聞きに来てくれる子供もいる。そういう触れ合いの場面を増やしていくとよいと思う。

（参加者）市民の多くが感じているように、ルールやモラルを守る子供になってほしい。最近ではダイバーシティやインクルージョンなど、色々なカタカナ言葉が使われているが、理解している大人は少ないのではないかと思う。自分が一番言いたいのは、人としての原理原則、ルールやモラルが前提にあり、その上で主体性や先ほど申し上げた考え方が出てくると思う。子供の夢や希望の話が先ほど出てきたが、私は夢を持っておらず、夢を模索する期間があってもいいと思う。また、現実を見て、夢を諦めることもあるだろうし、夢に向かって努力をしていくことも考えられる。親は親が知りうる範囲で選択肢を教え、学校は色々な分野とのつながりがあるので、多くの選択肢を教えることがで

きる。Sciety5.0と言われる今の時代、親世代が知らない職業もたくさんあると思うので、家庭だけでは限界がある。保護者をサポートする意味合いでも教育環境を整えていただけるとありがたい。

（参加者）情報量が多い今の時代に、子供が自分の夢を決めるのは難しいと思う。色々なものは情報として入ってくるが、現実的でなかったり具体的な道筋を見つけるのが難しかったりと、子供としてももやもやする部分があると思う。親としては、子供の夢がはっきりとしていなくても、子供が目の前のことを誠実に取り組んでいけるように声かけをしていくことが大事だと感じた。また、私は学校支援コーディネーターをしているが、職業体験は各学校が主体となって、各企業に依頼をしている。企業からすると、業務が止まってしまう場合があり、受け入れ先にも何らかのメリットを示すことができると、企業にも子供にもよいと思う。

（参加者）私は医療機関に勤務しているが、人口減少で人手不足が懸念される中、職業体験は自分たちの仕事を知ってもらえるよい機会と捉えている。今の話を聞いて、学校と企業で意識のズレがあるかもしれないと感じた。職業体験の前後に学校と企業で話をするなどして、お互いの思いを伝えることが大事かもしれない。

（参加者）中学生が来てくれてうれしいと言ってくれる企業はとても多いが、企業に依頼をする側としては、時間や人を割いていただいているという思いがある。

（参加者）中学生と高校生の子供がおり、通学に時間がかかっている。子供が部活動でサッカーをやっていることもあり、親と子供が関われる時間は少ないと感じている。例えば、子供が20時に帰宅した場合、ご飯を食べて宿題をすると、親と子供の会話は23時から開始となり、正直時間がとれない。子供と関われる時間が少ない中で、他の家庭ではどのように効率的に将来の夢などの話を子供としているかを知りたい。

（参加者）中学生と小学生の子供がおり、確かに中学生は忙しいと感じる。部活動で吹奏楽をやっており、帰宅しても練習をしたり宿題をしたりして、なかなか話をする時間がとれない。我が家は私が土曜日に部活動送迎をしているので、その時間を活用して子供と話をしている。時間は10分程度と短いが、色々な話をしている。

（参加者）移動時間を有効活用しているとのことだが、時間が短いと進路などの込み入った話は難しいのではないか。

（参加者）最近の話だと、高校を調べる宿題のようなものがあったので、あの学校は遠

いとか、そんな話をした。

（参加者）住宅内のエネルギー収支をゼロ以下にする「ゼロ・エネルギー・ハウス」という考えがある。学校施設にもエアコン設置が進んでいるが、学校自体の断熱性を高めなければ非常に効率が悪い。教育委員会だけの話ではないと思うが、建て替えや大規模改修で断熱性を高めることで、環境にも配慮した施設になっていくと思う。

（事務局）学校は施設規模が大きく、１校の建て替えだけで莫大なお金がかかるということはご理解いただきたい。

（参加者）私の学校は小規模校だが、他学年との距離も近く、小規模校ならではの教育があってもいいと思っている。運動会は保護者の方が多い場合もあるが、場所取りをしなくても全員が見学することができる。また、子供が全学年の子供の名前を知っていて、つながりがある環境である。天竜区を教育の特区にして、色々なことをしていけるとよいと思う。ただ、部活動に関して言うと街中と田舎では格差が広がっていると思う。大規模校は切磋琢磨できる環境が整っているが、小規模校は大会に参加できればよい、というスタンスのところもある。また、スポーツに限らず、地域の自然の中でできることを行うような、地域によって異なる活動があってもよいと思う。

（参加者）例えば、ＩＣＴを活用して、別の学校とつながることができれば、小規模の学校でも色々な人と関わることができると思う。自分が通っていたころの学校は、学級が複数あり多くの子供がいたが、今は複式学級もあるくらい子供の数が減少している。中学校も自分の時にはあった部活動が無くなり、今はクラブチームに入らないと活動ができない。ただ、自分の住んでいる地域にはクラブチームはないので、遠くまで行くしかない。教員の働き方改革もあるかもしれないが、例えば学校施設を利用して講師を呼んで部活動をするなどの活動ができるとよい。街中の子供は活動場所まで徒歩で行ける一方、田舎の子供は親が１時間以上かけて送迎をしないといけなくて、大変である。

（参加者）今は送迎や通学バスがあるので、田舎の子供の方が運動できないと思う。せっかく才能があっても発揮できないまま終わってしまう場合がある。私の子供もスポーツをやっているが、１時間かけて送迎をしている。せっかく学校という広い施設があるので、逆に街中の子供が田舎の学校に来てもらってもよいと思う。

（参加者）第４次計画で、「多様性」という言葉が出てくるが、教員の働き方と相反するイメージがある。例えば、不登校や外国籍の子供など、支援が必要な子供が昔に比べて増加しているため、教員も対応が増えてくると思うが、その分忙しくなるとも思う。

働き方改革は必要なことだが、一方で対応しなければいけないことは増えているのが現状だと思う。そのバランスをどうとっていくかが難しい。PTA でも手伝えることがあれば行いたいが、一人一人の子供の対応だと、個人情報等の関係もあって PTA では対応できないと思う。

（教育長）例えば、不登校でも「登校」と「不登校」の２つだけが選択肢ではない。校外まなびの教室という仕組みがあり、自分が通っている学校の教室には行けないが、そこであれば行ける子供達が通っているように、他の選択肢があることが重要。家から出られない子供には、ＩＣＴの活用など、今よりも選択肢を増やす努力をしていかなければならないと思う。外国籍の子供も、日本語のレベルや家庭の考え方が全く違う中で、どのような教育ができるかを考えなければいけない。江南教室という初期日本語指導拠点での日本語指導などで、子供の選択肢を増やしていくことが必要だと感じている。一方で、教員の負担軽減として校務アシスタントや外部人材の活用等をしていくことが必要になってくる。学校ですべてを担うのは難しいので、この部分は学校が担う、この部分は保護者や地域にお願いする、というようなことが必要ではないか、と思っている。色々な人が関わっていくという部分もコンセプトの多様性に関係してきている。

（参加者）子供の友達が中学生の時に学校に行けなくなってしまったが、子供は以前と変わらず接している。その友達も校外まなびの教室に行っているようで、楽しく過ごしていると聞いているが、もっと学びの教室の存在や内容を情報発信していって、不登校に対する区別や差別が無くなっていくとよいと思う。

（田中委員）多くの大人と関わっていくということで、職場体験はそれぞれの地域の特色が出てくると思う。小規模校の話も出ていたが、山間部ならではの体験に触れることで視野が広がることもあると感じるので、そういったものが広く展開されるとよいと思う。

（神谷委員）地域性や規模感などを考えると、教育を効率や生産性だけで考えるのは難しいと思う。保護者からすると、学校について知らないこともたくさんあるので、色々な情報を出してもらえるとよい。環境面では、子供の数は減少しているが、支援の必要な子供は増加傾向にあり、それでも教員が不足しているとなると、地域や保護者の参画が必要になってくると思う。昔とは学校と家庭や地域との関わりは変わってきているので、コミュニティ・スクールを活用してそれぞれの関わり方を見つけていけるとよい。私は、運動系習い事の奨学金制度を立ち上げており、友人は中学のバスケットボール部がないため、クラブチームを立ち上げた。待っていても状況が変わることはそんなにないので、自分や周りの人ができることを積極的にやっていくことが大事だと思う。また、

今日の出席者の皆さんは地域やPTAの一員としての役割があると思うが、まずは自分の子供をちゃんと育てていくことが必要だと感じる。子供と話をする機会を持ちたいと思う気持ちは分かるが、子供は時間がある時に自分から言ってくるので、その時には話をしている。

（教育長）貴重な意見をいただき、感謝する。今日出された意見を参考にさせていただき、時期の計画を策定していく。保護者や地域を巻き込みながら教育を進めていくことは大変重要なので、今後も本市の教育への協力をお願いしたい。